

防火訓練の教訓

森 智*



先日、当研究所において防火訓練を行い、地元消防署の皆さんの御協力も得て、無事訓練を実施できました。事前に段取りを決めて一通り役割も確認した上で訓練だったこともあり、全体として整然と行うことが出来たと思います。

また、防火意識を高めると同時に自衛消防の役割を再確認するという意味でもその目的を果たすことが出来たのではないかと考えています。いざという時に消火器や消火栓の位置を覚えておくことは大変重要なことであり、万一の時に備えてきちんと訓練しておくことはひょっとすると生死を分けるかもしれないと改めて感じたところです。

これまでに防火訓練だけでなく、防災訓練、地震訓練などを行っていますが、実際に事が起こった時に落ち着いて対処できるのか、今ひとつ不安なところがあります。当然その時に備えて過去の事例に学びマニュアルを整備し、それに沿った形の訓練に参加しているのですが、どこか訓練のための訓練という気持ちがあり反省しなければなりません。

それにしても、この度の津波の映像を見る度に、もし自分がその場にいたらどうしただろうと考えてしまいます。恐らく避難勧告が出て直ぐには行動せず、様子見を決め込み、そのうち周りの人達が動き出すと自分も不安になってくる、その時はもう間に合わないという状況が容易に想像できます。逃げ遅れて被災された方々のことは、とても他人事ではなくそれはまさしく自分自身だと思わざるを得ません。

ある調査によると避難勧告が発令されても、身に及ぶ危険を意識しない人がやはり5割強もいるそうです。

防災研究家の片田敏孝群馬大学大学院教授によると、人が逃げないのは災いに対して心の安定を保つために「正常化の偏見」という心理が働くからだそうです。自分にとって都合の悪い情報は無視し、都合のい

いことは過大評価するという、実に都合のいい考え方をするのが人間だということです。

なるほど、そう言われてみれば思い当たります。何故か根拠もなく、いつも自分だけは大丈夫と考えています。

また、防災アドバイザーの山村武彦氏によると、実験の結果、火事のような緊急時に、人間は1人にいるときは「何が起きたのか」と、すぐ自分の判断で行動を起こすが、複数の人間がいると「皆でいるから」という安心感で、緊急行動が遅れる傾向にある。また、集団にいると自分だけがほかの人と違う行動を取りにくくなるため、お互いが無意識にけん制し合い、自分個人よりも集団に過大評価を加えているというのです。

「皆でいるから」の心理が働いて、その場にじっとしている自分に気付いたら、先のJRの出火事故(乗客が自主的に脱出したことにより、一人の犠牲者も出なかった)に遭った乗客の証言「最初に飛び出した人がいなければ危なかった」という言葉を思い起こす必要があるかもしれません。

このように、災害などの危険が迫ったとき、人はどのような心理状態に陥って、どのような行動をとるのか。ということをやめ想定した対策が必要だという指摘は大変重要なことだと思います。

火災発生などの際に人間が冷静に対応できないことを予め見越した対策のひとつとして、「火事だ!」とあえて声を出すこと。声を出すのは知らせるためだけでなく、自らを落ち着かせ冷静さを取り戻すのに役立つのだそうです。

この度の防火訓練の際にも、消火作業前に「火事だ!」と大声で叫ぶようにとの指導を受けました。いま考えると、『まず、大声で叫ぶ』ということが防火訓練の最も重要な教訓だったのかもしれない。

(独)土木研究所 寒地土木研究所 管理部長*